

観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書

平成10年度国庫補助事業報告書

丸山古墳

1999. 3

観音寺市教育委員会



丸山古墳の石室と石棺（南側から）



航空写真（丸山古墳↓、有明浜、九十九山、七宝山を望む）

例 言

1. 本書は、観音寺市教育委員会が平成10年度国庫補助事業として実施した、観音寺市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
2. 今回の発掘調査は、香川県観音寺市室本町字西丸山691番に所在する丸山古墳を対象とした。
3. 発掘調査及び本書の執筆・編集は、観音寺市教育委員会事務局生涯学習課 文化振興係 主任主事 久保田昇三が担当した。また、出土遺物の整理、実測の一部は片桐節子が担当した。
4. 挿図の一部に観音寺市全図其の1 (1/10,000) を使用した。図面の方位はすべて、磁針方位で示した。また、実測図等の縮尺はすべてスケールで表示した。
5. 出土遺物は観音寺市郷土資料館で保管している。
図面・写真等は観音寺市教育委員会事務局で保管している。
6. 本事業の実施にあたっては、室本新田自治会、宗教法人丸山神社代表役員西田準一氏、市文化財保護審議会長請川昇氏、発掘調査に携わった坂田昇氏、西山秋久氏、松本光男氏、牧野巧氏をはじめ、ご協力を頂いた方々に記して謝意を表します。
7. 本事業及び本書の作成にあたっては、次の方々よりご指導ご協力をいただいた。記して謝意を表します。(順不同・敬称略)
渡部明夫、松本敏三、片桐孝浩、蔵本晋司、藤井雄三、川畑聰、遠藤亮、山崎啓司 (航空写真提供)

目 次

巻頭グラビア・例言・目次

	頁
1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 立地と環境	1
周辺遺跡地図 (1/20,000)	2
3. 調査概要	3
丸山古墳周辺地形測量図・トレンチ配置図	5
丸山古墳石室実測図 (遺物出土状況図)	6
石棺実測図	7
土層図① (1. 石室西側側壁と石棺下層の状況、2. トレンチ1)	8
土層図② (3. トレンチ2、4. トレンチ3)	9
出土遺物実測図①	10
出土遺物実測図②	11
拓本① (1. 石棺南側短辺部、2. 石棺北側短辺部)	12
拓本② (3. 石棺蓋外面部)	13
4. まとめ	14
5. 写真目次	15
6. 参考資料①	30
参考資料②	31

1. 調査に至る経緯と経過

丸山古墳は、七宝山の稲積山から南に延びる尾根の少し高まった郷亀山と呼ばれる山頂部にあり、現在は丸山神社の境内にある。この地にはかつて皇太子神社が所在していたが室本浦に移され（慶長13-1608）、明治36（1903）年に巖島神社ができるまでなにも無かったようである。明治38（1905）年には山祇神社が遷座された。恐らく、この前後に墳丘が半分削られ、石室が発見されたのではないかと思われる。大正5（1916）年には山祇神社が丸山神社と改称され、大正14（1925）年に巖島・丸山神社が合祀され現在の丸山神社となっている。

昭和22（1947）年10月、旧三豊中学校（現在の香川県立観音寺第一高等学校）の教諭と生徒によって発掘調査が行われている。その当時の状況が史跡名勝天然記念物調査委員の和田正夫氏により報告されているので以下に簡単にその内容をまとめてみる。

- ・二つの竪穴式石室が確認されている。

第1号石室（石棺有）

石室幅 1.3~1.4m 石室高 1.15m 石室長 2.0m以上 石棺長 1.92m 石棺幅 1.05m

出土品 鉄刀2（石棺内） 鉄刀破片（石室内南東隅）

第2号石室（石棺無）（第1号石室に平行して東側約5mのところ）

石室幅 1.4m 石室高 1.6m 石室長 不明

出土品 鉄刀、鉄鏃など（詳細不明）

- ・その他の出土品

単甲破片？、円筒埴輪、朝顔形埴輪、キヌガサ形埴輪、家形埴輪など

- ・石棺について

南端から2/3程度のところで蓋が亀裂があり調査時に折れている。

蓋を取り外し内部の調査を行ったが、鉄刀以外の副葬品は確認できなかった。

以上のような状況であるが、現在に至るまでその具体的な資料が残されておらず、また、露出している石棺を観察すると蓋が身の内側にずれ落ちた状況もあり、今後の遺跡の保存が危惧される状態であった。そこで、平成10年10月から遺跡の保存と活用を図るための詳細な資料を得ることを目的として発掘調査を実施するに至った。

なお、当古墳は市内はもちろん三豊郡においても数少ない古墳時代中期の古墳であり、当地域の古墳文化を考察する上で貴重な文化財である。特に、第1号石室の刳抜式の舟形石棺は阿蘇熔結凝灰岩製であることがすでに確認されている。

2. 立地と環境

当古墳は、香川県西部の観音寺市内の室本町に所在し、海を間近にひかえ直線距離で約550mで瀬戸内海の有明浜に出る。墳頂部からは、北は紫雲出山遺跡のある荘内半島から西は愛媛県の東予地方の燧灘の沿岸や瀬戸内の島々はもちろんのこと天候に恵まれれば中国地方まで望むことができる。周辺の遺跡には、なつめの木の貝塚（縄文前期・後期）、室本遺跡（弥生前期）、鹿隈鐘子塚古墳（前期）、前の原箱式石棺墓、池の宮古墳（後期）、興昌寺山1号古墳（後期）がある。また、古墳時代以降の遺跡には、高屋廃寺、条里制跡、九十九山城などがあり、最も近くの七宝山（444m）の稲積山には延喜式内社の高屋神社が所在している。また、市内の原町には古墳時代中期の青塚古墳がある。当古墳は帆立貝式の前方後円墳といわれ丸山古墳と同様に阿蘇熔結凝灰岩製の石棺の一部（縄掛突起と短辺部の一部分のみ）が出土している。なお、阿蘇熔結凝灰岩製の石棺は現在のところ四国では3例（丸山古墳・青塚古墳・愛媛県蓮華寺在一いづれも刳抜式の舟形石棺か？）確認されている。

讃岐の石棺といえば国分寺町の鷲の山や津田町の火山の石材で割竹形石棺が製作され、県内はもちろんのこと県外にも搬出されている事例があるが、それとは時期も分布範囲も一線を画しているのが阿蘇熔結凝灰岩製の石棺である。

周辺遺跡地図 (1 : 20,000)



- | | | |
|-------------|------------|-------------|
| 1. 丸山古墳 | 2. 池の宮古墳 | 3. 室本遺跡 |
| 4. なつめの木の貝塚 | 5. 鹿隈罐子塚古墳 | 6. 興昌寺山1号古墳 |
| 7. 九十九山城 | | |

3. 調査概要

まず、調査の障害となる雑木の除去と周辺の清掃作業を行った。その後、墳丘と神社の境内（玉垣より内側）の地形測量を行い、調査区を設定してトレンチ調査を開始した。トレンチは計6カ所で、墳丘の周囲に配置した。（以下、トレンチはTで表現する。5頁のトレンチ配置図についても同様。例：トレンチ1→T1）以下が、その概要である。

- T1 ・墳丘斜面には葺石状の遺構が確認されたが、部分的に破壊を受けている。T2に見られるほどまとまったものではないが、転落によるものと、原位置を保っていると思われるものがある。葺石はほぼ地山（比較的やわらかい花崗土層）の上に葺かれており、計10cm程度の比較的丸みを帯びた安山岩が大半を占めているが、暗赤色の石材が散見される。この石材は稲積山に産出したものを搬入したものであると推定される。また、見かけ上の墳丘が周囲の通路部分になった境界の辺りに溝跡が確認されるが、地山の状況や遺物の出土状況により築造当初のものではないと考えられる。出土遺物は円筒埴輪片が4点出土している。
- T2 ・T1と同様に葺石が確認された。T1よりもまとまりがあるが、転落によるものも多い。先述の暗赤色の石材も3点であるが確認される。なお、T1のものに対応するように幅約40cm程度の溝が確認された。
- T3 ・墳丘の斜面には、T1、T2の様な葺石は確認されなかった。恐らく、破壊を受け削りとられていると思われる。周囲の通路にかかる所では、葺石と見られる石が堆積している。その大半が転落によるものと考えられるが、原位置と推定できるものもある。出土遺物は円筒埴輪片が6点出土している。
- T4 ・地表下10cm程度で墳丘南側に築かれている石垣の石材破片が乱雑にしかれていた。それを取り除くと葺石の一部と思われるものが検出された。恐らく転落と攪乱によるものと推定される。地山層の上にもる黄褐色土層がある程度墳丘のラインを反映しているのではないかと考えている。
- T5 ・遺物、遺構なし。
- T6 ・遺物、遺構なし。

次に、埋葬施設の残存状況の確認のため第1号石室の検出を行った。石室並びに石棺は昭和22年の調査後埋め戻されていたが、一部が露出していたので調査前から位置と方向については想定できた。石室上部には径10cm程度の本が2本植生していてその根が石室床面、石棺を包むように侵入していた。石室の天井石（蓋石）はすべて取り除かれ、それと思われる石材が石室東側の側壁が存在していたであろう位置にずれ落ちた状況を確認した。また、神社の境内にも蓋石と思われる石材が4点確認され最低でも石室東側に落下しているものを合わせると6点のものが想定できる。石材は、花崗岩、安山岩等さまざまである。石室内には埋め戻された石材が大量の土に乱雑に混入されている状態であった。

石室について

石室の平面形は西側側壁は南側端の現存しているところから石棺のある辺りまでは直線的であるが、しだいに北側の壁（本書では奥壁と呼ぶことにする）に近づくにつれゆるやかにバチ状に広がっている。東側側壁は前述のように蓋石が落下しており破壊されている状況がみられるが、一石ではあるが床面辺りの側壁と思われるものを確認しているので、それが原位置を保っているとすれば同様に奥壁側はバチ状に広がる構造と推定できる。現存の石室長は約4mであるが、石棺と奥壁の間に空間部が存在するので、それと同様の空間部が南側にもあるならば、推定長約4.3mの規模となる。次に、石室幅であるが東側側壁が破壊されているが、先ほどの確認された石を参考にするならば、奥壁のバチ状に広がったところで推定幅約2.1mとなる。

石室の構築方法は西側側壁付近と石棺下層の状況を観察すると、標高47.3m前後に一次墳丘というべ

きであろうか固く土壤改良した版築層が基盤を形成している。次に、石棺を設置するための台状のステージを計4回に分けて形成している。その後、側壁の基底石を設置し、石材を2段目、3段目と置きながら、石室内では白色の粘土を台状のステージと石の間に詰め、側壁外側は控えの石や版築をしながら墳丘を構築している。一方、石室内は白色粘土（小さい円礫が混入されている）を床面に敷き詰めた後、石棺を設置し、更に、径3～5cm程度の玉砂利が多く混入する灰色粘土で（石棺の安定を図るためか？）石棺の底部を一部埋める状態（7～8cm程度）まで敷き詰め床面を形成している。後述の鉄刀や鉄器などもこの床面から出土している。なお、東側側壁の状況については破壊や木の根等によりその確認がきわめて困難であるが、最低でも西側側壁より2mまでは台状ステージの落ち込みや側壁との間の白色粘土の充填層は確認できなかった。

石棺について

石棺の蓋は昭和22年の調査時の記録によれば、既に1/3の所で亀裂が入り割れていたようであり、今回、確認したところ南側から2/3程度のところで大きく割れ石棺の身の内側にずれ落ちた状態であった。その上それ自体も亀裂が何カ所かに入り4個に割れていた。残る北側の1/3の蓋については多少ずれていたが身の上ののっており、縄掛突起も良好な状態であった。蓋の屋根部分は全体的に東側が破損度合いがひどくすべてのパーツが揃っていない。地形測量時に、蓋の一部が墳丘周囲に散在していた石の中から見つけられた状況から考えると残りのパーツもまだどこかに埋もれていることも考えられる。また、寄棟造の屋根の平坦部は特に風化の度合いが著しいが、平坦部幅は7～8cmであり比較的狭いものとなっている。なお、南側の縄掛突起は付け根から折れており、以前から観音寺市郷土資料館に保管している。（今回はその突起を実測し、推定復原して図版内に示した。）

身については、一部の損傷は受けているものの蓋のような大きな亀裂や割れなどは見られない。短辺部に設けられた突起も双方良好な状態であった。ただ、北側の突起は南側のものに比べ約3cm短い。さて、身の内部であるが、前回の調査時に調べられた記録があり、あまり期待はできなかったが、やはり副葬品は何も検出されず、内部に堆積している埋土からは円筒埴輪片や石棺の破砕片、1円や5円硬貨などが検出された。恐らく、埋め戻し時に堆積した土の中にその様なものが混入していたか、調査以後に入れられたものであろう。また、南側短辺部近くの床面から朱と思われる跡が確認されている。

石棺全体を見てみると、やはり縄掛突起が目につく、後段の石棺実測図の側面図をみると折れて資料館に保管されているものを除くと全体にしっかりと造られた感じを受けるが、資料館保管のものを復原してみると、付け根の部分が比較的細く先端に行くにつれ太くなって少し脆弱な造りとなっている。また、4個の突起の先端部の面は概ね平坦になっているが、部分的に面取り調整された痕がみられる。加えて、この棺の特徴づけているものに、一般的に舟べり状の突帯といわれるものが印象的である。この突帯の幅は約9～10cmで、平坦に加工された身と蓋の合わせ面（幅約10～11cm）近くの周囲に設けられている。短辺部の両端では、身の突帯はやや斜め下方に広がり、蓋の突帯はやや斜め上方に広がり、長辺部の両端は身も蓋もやや斜め上方に広がる形態である。

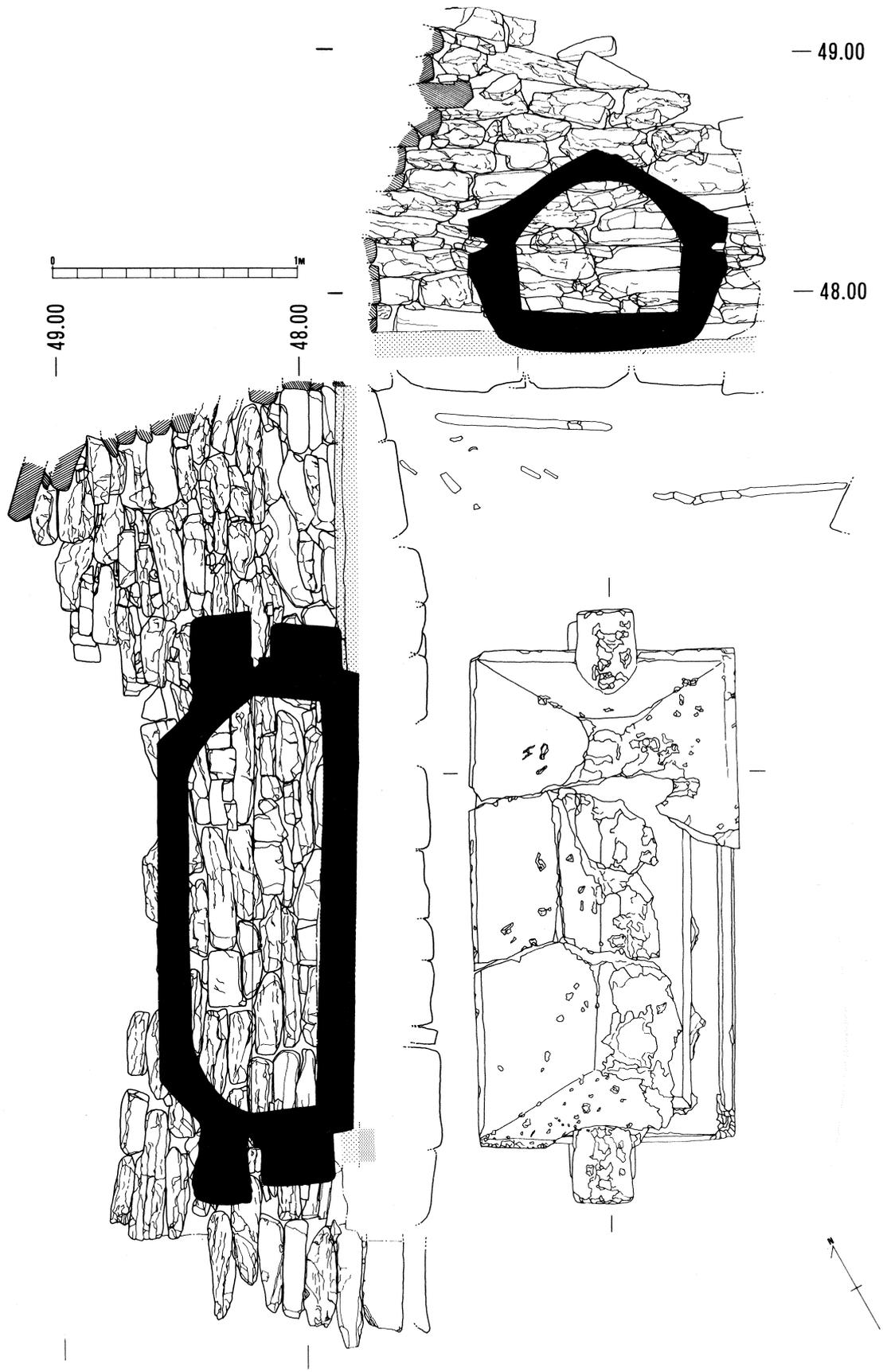
本石棺のもう一つの特徴は、石棺の加工痕が良好な状態で残っていることである。石棺の加工方法、技術を知る上で興味深い資料であり、加工工具の幅や加工方向、順序などが推定できる箇所が多くみられる。例えば、石棺身の内側の全面・身外面の両短辺部・舟べり状の突帯・突起、蓋の外面・突起の部分などで、詳細については今後検討を加えていきたい。参考として後段に拓本の一部を掲載している。阿蘇熔結凝灰岩は水分を含むと黒色をしているが、水分が無くなり乾燥すると灰白色に変化する。加工痕の状況から、やわらかく石材を削り抜いて石棺を製作するにはよい条件を備えているが、縄掛突起や蓋の破損状況からも外部からの力等には、もろいという性質もあるようである。

出土遺物について

先述のとおりトレンチ（T1～T4）、石室内の埋土、石棺埋土の中から円筒埴輪片が出土している。



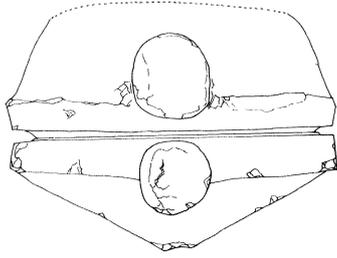
丸山古墳周辺地形測量図・トレンチ配置図



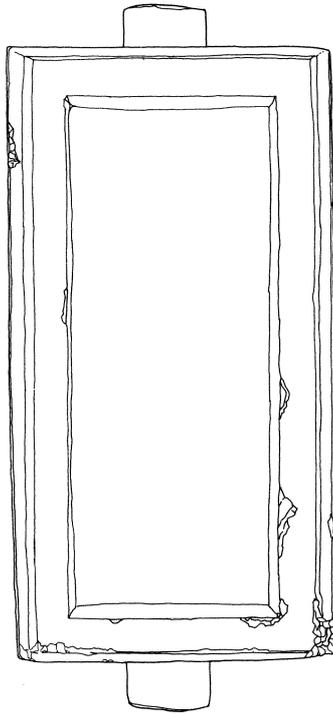
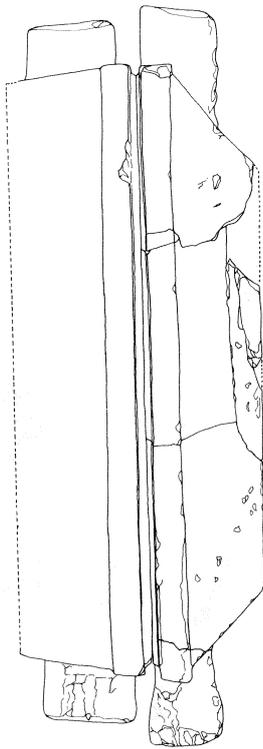
丸山古墳石室実測図（遺物出土状況図）

※南西側石棺蓋の突起は既に折れていたもの（郷土資料館保管）を推定復原した。
 ※身の底部は推定した。

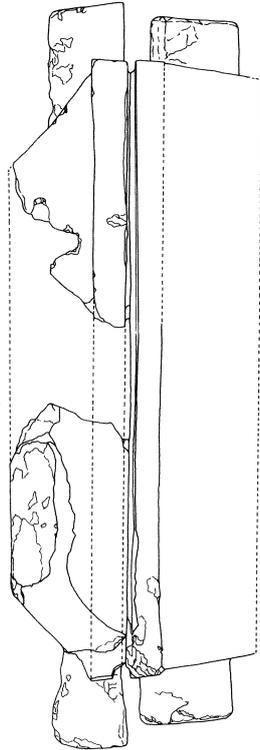
北側短辺部



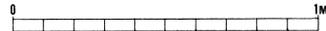
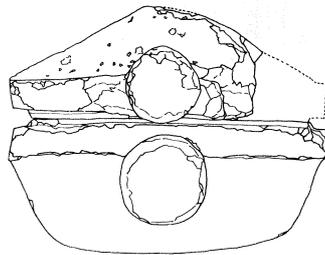
西側長辺部



東側長辺部

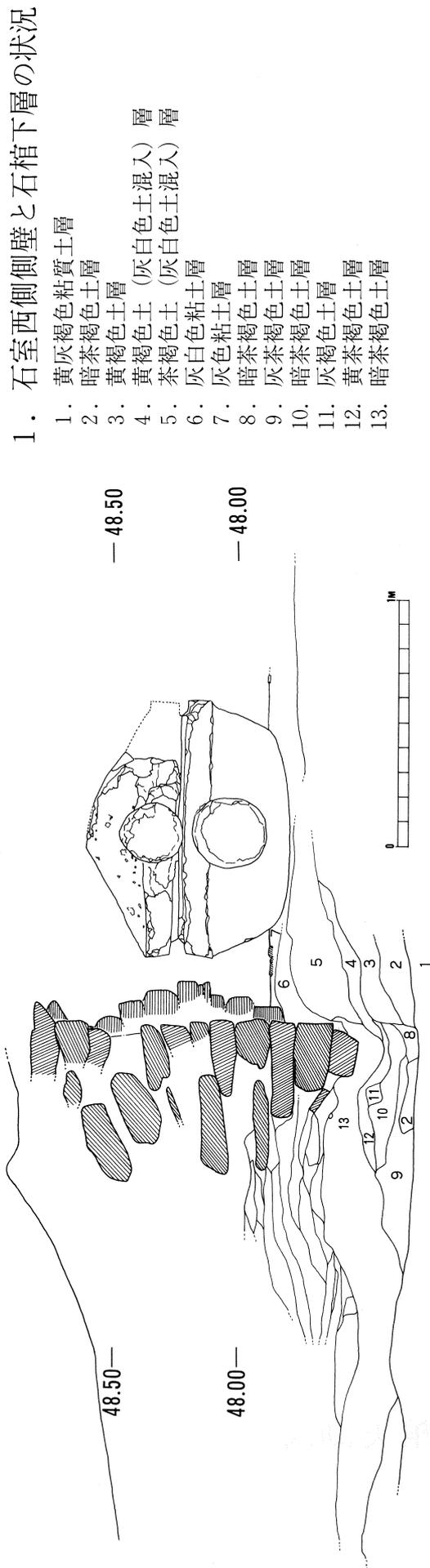


南側短辺部

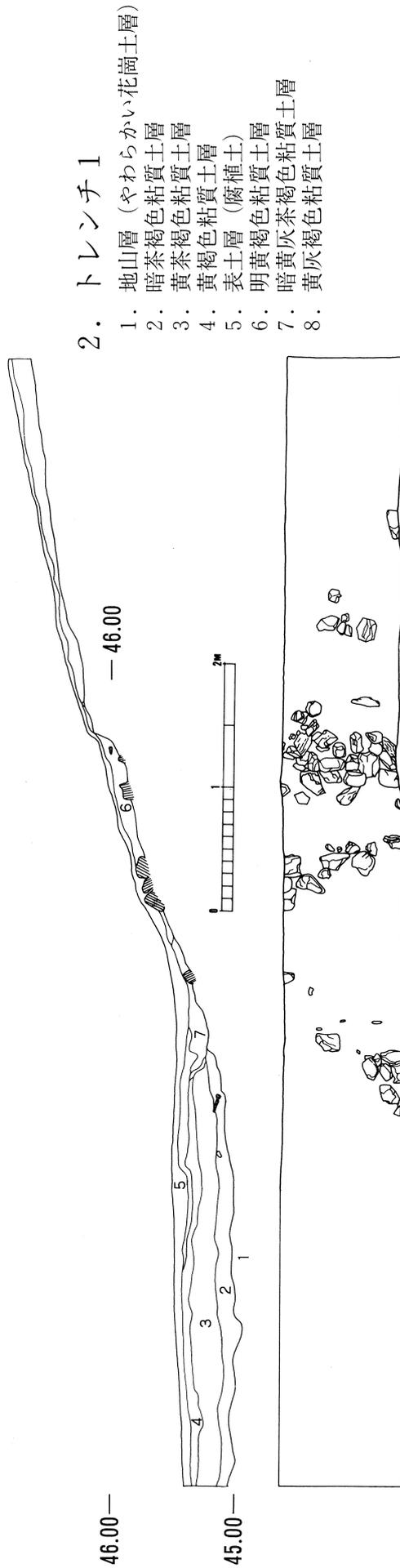


石棺実測図

土層図(1)



1. 黄灰褐色粘質土層
2. 暗茶褐色土層
3. 黄褐色土層
4. 黄褐色土 (灰白色土混入) 層
5. 茶褐色土 (灰白色土混入) 層
6. 灰白色粘土層
7. 灰色粘土層
8. 暗茶褐色土層
9. 灰茶褐色土層
10. 暗茶褐色土層
11. 灰褐色土層
12. 黄茶褐色土層
13. 暗茶褐色土層

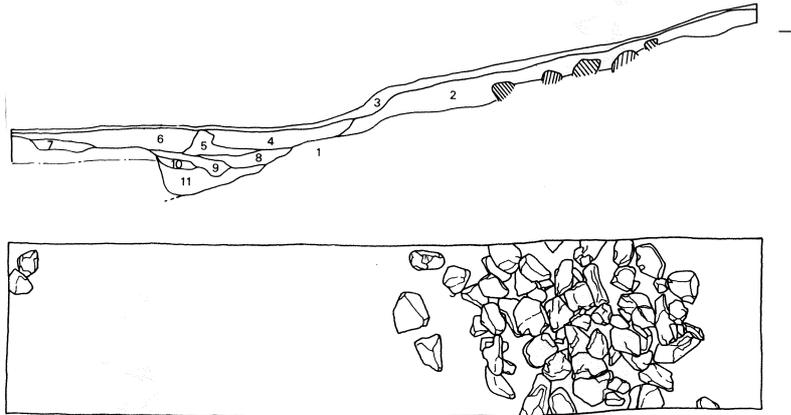


1. 地山層 (やわらかい花崗土層)
2. 暗茶褐色粘質土層
3. 黄褐色粘質土層
4. 黄褐色粘質土層
5. 表土層 (腐植土)
6. 明黄褐色粘質土層
7. 暗黄灰茶褐色粘質土層
8. 黄灰褐色粘質土層

土層図(2)

3. トレンチ 2

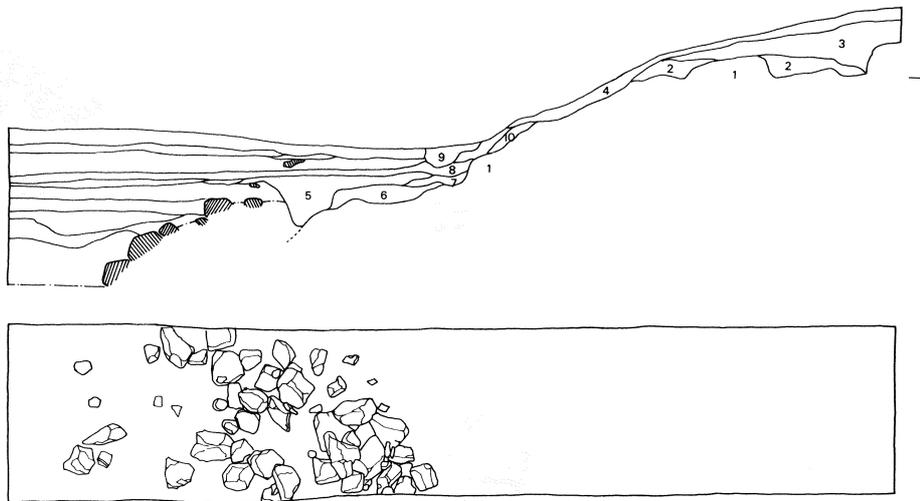
46.00-



1. 地山層 (やわらかい花崗土)
2. 黄茶褐色粘質土層
3. 表土層 (腐植土)
4. 茶褐色土層 (花崗土)
5. 黄茶褐色粘質土層 (花崗土混入)
6. 黄褐色土層
7. 黄灰褐色粘質土層
8. 黄茶褐色粘質土層 (花崗土混入)
9. 黄褐色土層
10. 暗茶褐色粘質土層
11. 暗灰茶褐色粘質土層

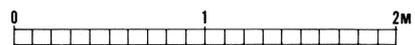
46.00-

45.00-

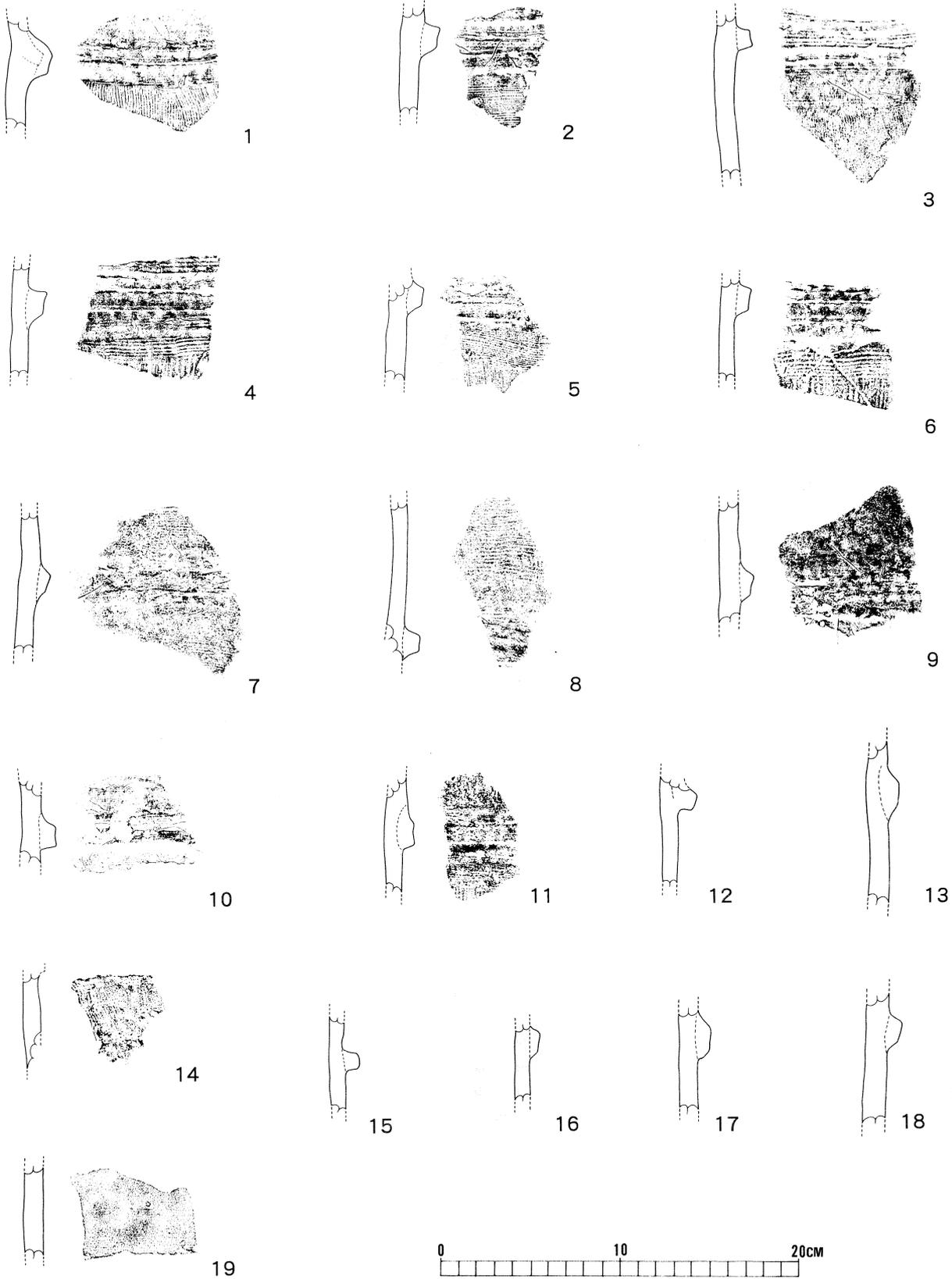


4. トレンチ 3

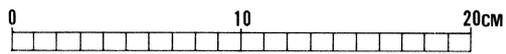
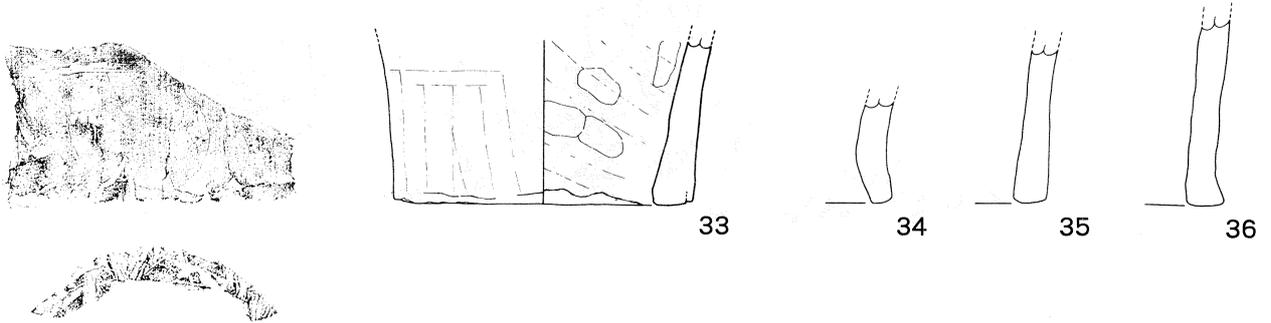
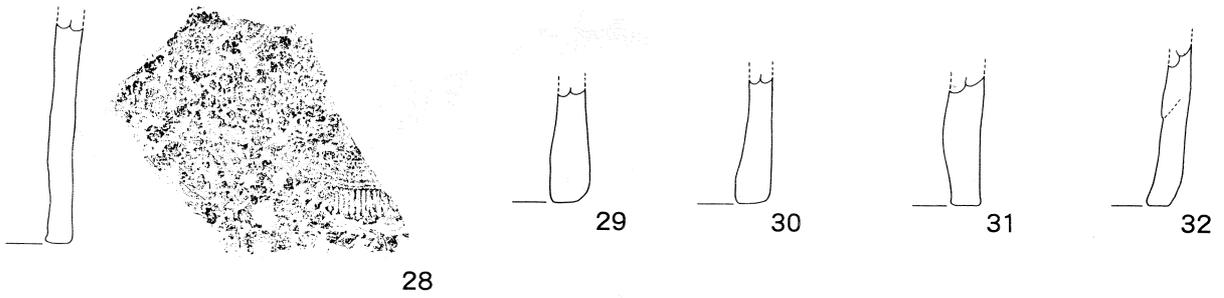
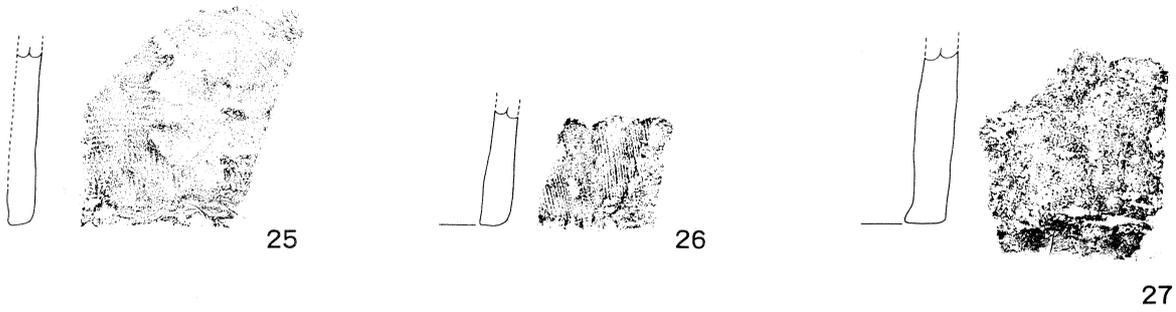
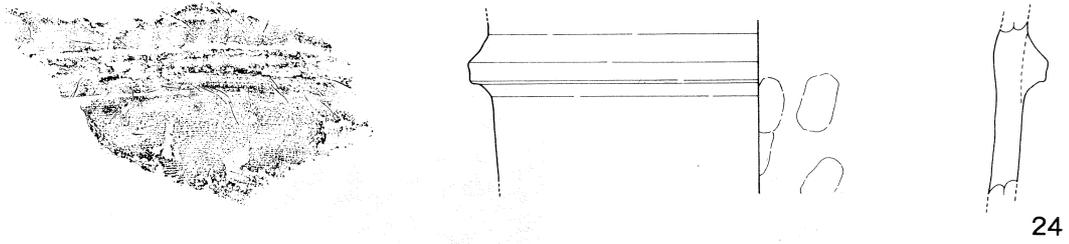
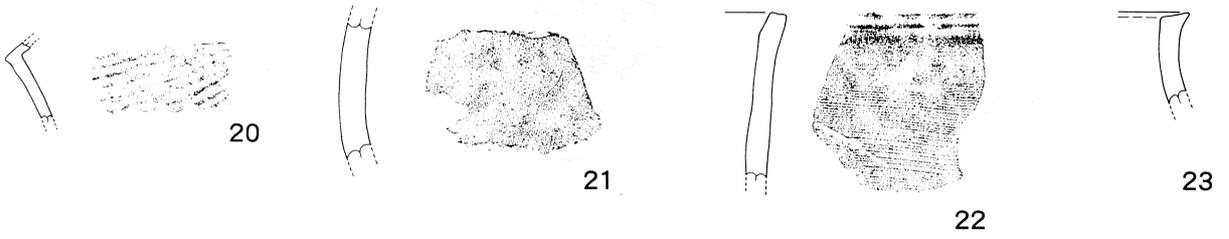
1. 地山層 (やわらかい花崗土)
2. 暗灰茶褐色粘質土層
3. 黄茶褐色粘質土層
4. 表土層 (腐植土)
5. 黒茶褐色粘質土層
6. 黄茶灰色粘質土層
7. 黒灰色粘質土層
8. 暗黄茶褐色粘質土層
9. 暗茶褐色粘質土層
10. 灰褐色粘質土層



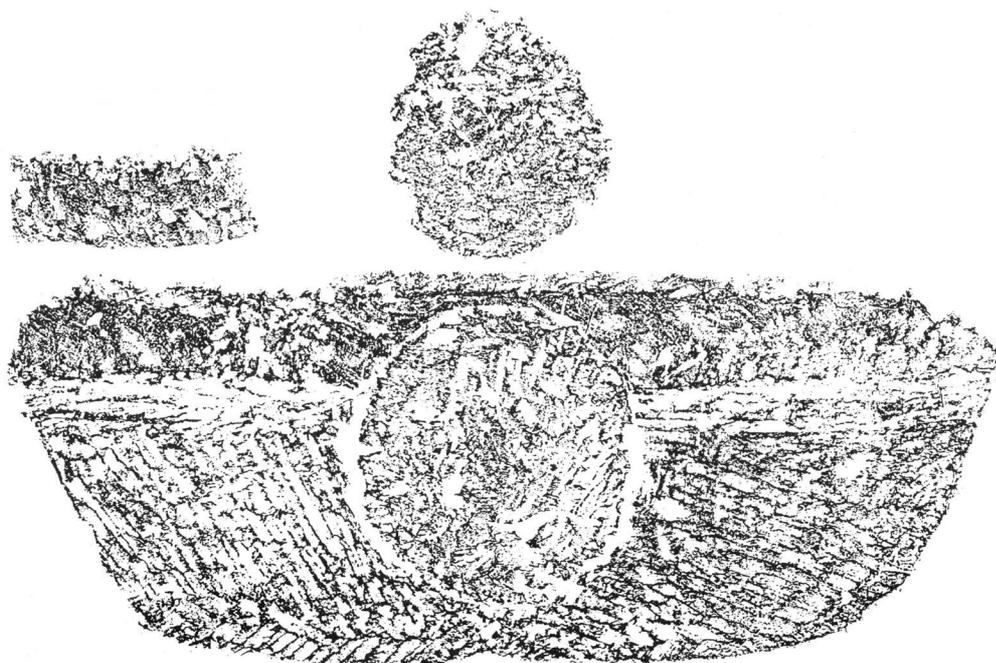
出土遺物実測図(1)



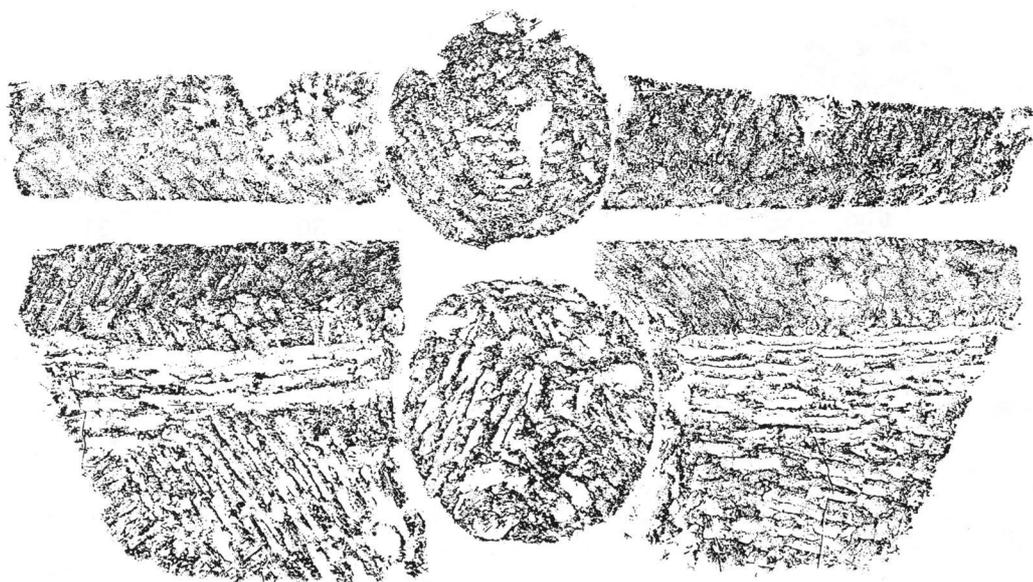
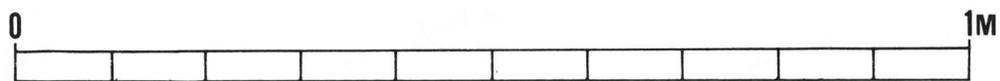
出土遺物実測図(2)



拓本(1)



1. 石棺南侧短边部

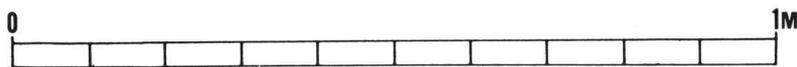


2. 石棺北侧短边部

拓本(2)



3. 石棺蓋外面部



いずれも破片であり、その多くは接合は不可能な状態である。まして、埴輪列などは検出できなかった。埴輪片のタガは台形状のものが一部みられるほかは概ね突出度の高いものはあまり見られない、黒斑のあるものもみられず、スカシの形状がわかるものもない。また、外面調整はタテハケのみのもの、タテハケの後ヨコハケのもの、ヨコハケのみのものがある。ヨコハケについては、B種ヨコハケ（遺物No.4、22）のあるものが少ないが確認できる。内面調整は、指押え、ハケ、ナデ（指ナデ、板ナデ）によるものがある。詳細については今後検討を加えたいが、現在のところ、タガの形状や外面調整、黒斑のものがみられないこと、須恵器の出土例がないことなどから川西編年のⅣ期（5世紀中葉～後半）頃のものとして推定している。

円筒埴輪のほかには鉄器が出土している。おもに、石棺と奥壁との1mあまりの空間部の径3～5cm程度の玉砂利が混入する灰色粘土層の上面から出土している。遺物出土状況図（6頁）に示したように2点の鉄刀が出土している。一つは、石室奥壁近く（奥壁から約10cm）の中央から西よりに奥壁にほぼ平行して出土した。（全長約79cm、最大幅約4cm）もう一つは、奥壁から約40cmで東よりにこれも奥壁にほぼ平行して出土した。（全長約83cm、最大幅約3cm）また、その他に破片ではあるが鉄刀の一部とみられるものや細片ではあるがその他の種類（武器、武具？）の鉄器片も出土している。これについても今後検討をしていきたい。

4. まとめ

今回の調査では、遺跡の今後の保存と活用を図るための資料を得るため古墳の墳丘とその周囲の状況や昭和22年に調査された第1号石室、石棺の残存状況を確認した。石室については、西側壁、奥壁のみが残存しており、その他については、相当な破壊を受けていることが判明した。残存している部分から石室の平面形が奥壁側に近づくにつれゆるやかにバチ状に広がる形状であることや鉄刀が出土した石棺と奥壁との間の1mあまりの空間部の存在がこの石室の特徴であると言える。もう一点あげるとすれば石棺下層の状況から石室構築過程の最初に石棺を設置するための台状のステージを構築していることが確認されたことである。古墳の構築方法を考察するうえで興味深い事例であると思われる。

石棺については、蓋が大きく割れ、破損している状況が確認されたが、資料館保管の突起や墳丘から発見された破片等をあわせると一部を除きほぼ部材はそろっている。特に、その残存状況が危惧されていた北側の突起の部分は身蓋ともほぼ良好な状態であった。また、石棺の表面には加工痕が良好な状態で残されており、加工方法や技術の一端がうかがえる。

墳丘については、T1～T3などで葺石が確認されたが、墳裾については後世のものと考えられる溝（T1～T3）で破壊を受けているが、周囲の状況からその付近に求めることができるのではないかとと思われる。仮に、この地点が墳裾であるとするならば、第1号石室の奥壁までの距離は約17mを測る。墳丘周囲の特に玉垣の外側の地形が大きく改変されていなければ、その状況から北東から南西に長い楕円の墳形が想定されるが、墳丘規模とともに今後再度確認を行う必要がある。

最後に、今後の課題として、前述のものほかに第1号石室の東側側壁の確認、第2号石室の位置・規模等の確認を行い第1号石室と第2号石室の関係の把握がこの遺跡の性格を知るうえで重要なポイントであると考えられる。また、遺跡の保存と活用に関しても今後十分な検討を重ねていきたい。

5. 写真

目 次

1. 調査前の状況（墳丘南側）
2. 調査前の状況（墳丘北側）
3. 調査前の状況（墳丘西側）
4. 調査前の石室・石棺の状況
5. 石室・石棺の検出状況（東側より）
6. 石室・石棺の検出状況（西側より）
7. 石棺(蓋)撤去後の石棺(身)の状況（北側より）
8. 石棺(蓋)撤去後の石棺(身)の状況（西側より）
9. 石棺(身)内部の状況—埋土内より5円硬貨や石棺の破片が確認された。
10. 石棺(身)内部精査後の状況（東側より）
11. 石棺(蓋)復原後の状況（北側より）—蓋中央部は復原していない。
12. 石棺(蓋)復原後の状況（西側より）—蓋中央部は復原していない。
13. 石室奥壁の状況
14. 石室西側側壁の状況
15. 石棺南側短辺部
16. 石棺北側短辺部
17. トレンチ1・2
18. トレンチ3
19. トレンチ4
20. トレンチ5
21. トレンチ6
22. トレンチ1・2・3（墳頂部付近より）
23. トレンチ1・2・3と墳丘の状況
24. 石棺下層の状況
25. 石室西側側壁付近・側壁外側の状況
26. 出土遺物（実測図 No.1）
27. 出土遺物（実測図 No.3）
28. 出土遺物（実測図 No.4）
29. 出土遺物（実測図 No.5）
30. 出土遺物（実測図 No.6）
31. 出土遺物（実測図 No.21）
32. 出土遺物（実測図 No.24）
33. 出土遺物（実測図 No.22）
34. 出土遺物（実測図 No.25）
35. 出土遺物（実測図 No.33）
36. 出土遺物（鉄器の出土状況）



1. 調査前の状況（墳丘南側）



2. 調査前の状況（墳丘北側）



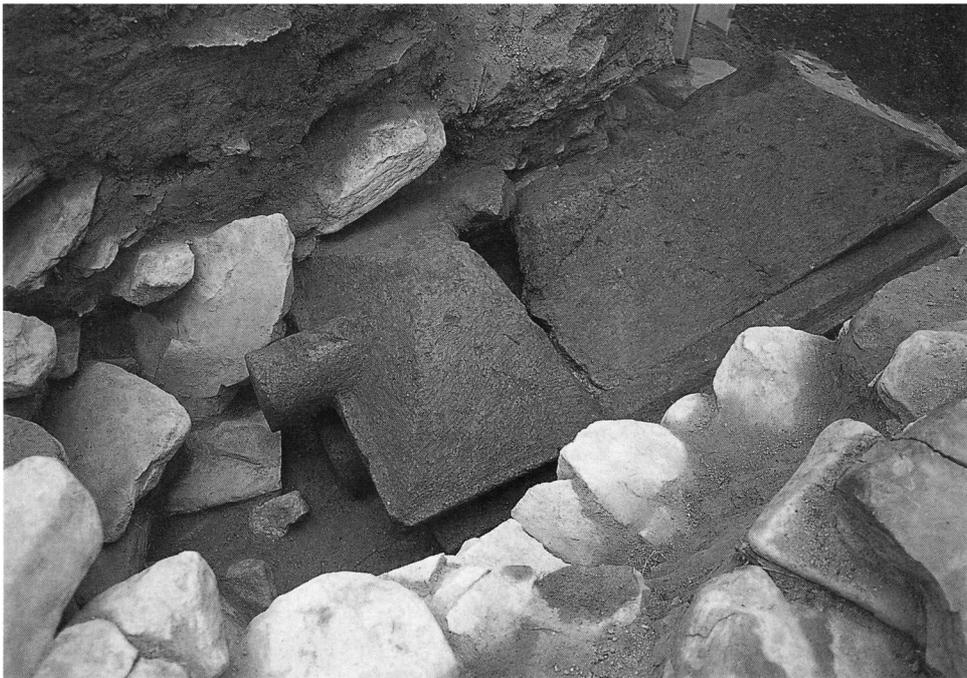
3. 調査前の状況（墳丘西側）



4. 調査前の石室・石棺の状況



5. 石室・石棺の検出状況（東側より）



6. 石室・石棺の検出状況（西側より）



7. 石棺（蓋）撤去後の石棺（身）の状況（北側より）



8. 石棺（蓋）撤去後の石棺（身）の状況（西側より）



9. 石棺（身）内部の状況



10. 石棺（身）内部精査後の状況（東側より）



11. 石棺（蓋）復原後の状況（北側より）



12. 石棺（蓋）復原後の状況（西側より）



13. 石室奥壁の状況



14. 石室西側側壁の状況



15. 石棺南側短辺部



16. 石棺北側短辺部



17. トレンチ1・2



18. トレンチ3



19. トレンチ 4



20. トレンチ 5



21. トレンチ 6



22. トレンチ 1・2・3 (墳頂部付近より)



23. トレンチ 1・2・3 と墳丘の状況

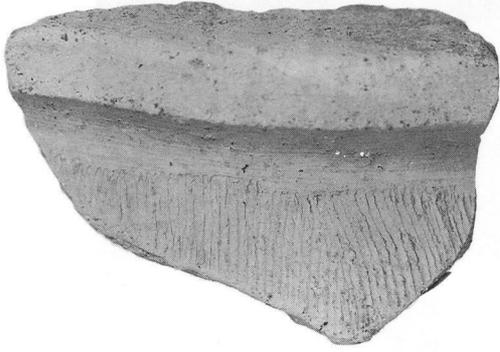


24. 石棺下層の状況



25. 石室西側側壁付近・側壁外側の状況

出土遺物 ①



26. (実測図 No. 1)



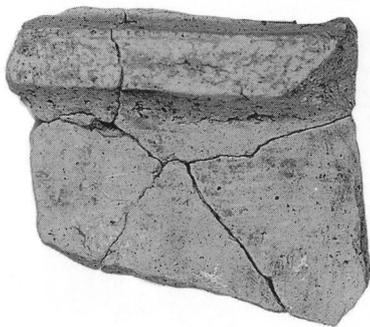
27. (実測図 No. 3)



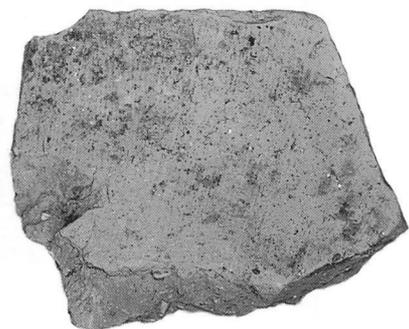
28. (実測図 No. 4)



29. (実測図 No. 5)



30. (実測図 No. 6)



31. (実測図 No.21)

出土遺物②



32. (実測図 No.24)



33. (実測図 No.22)



34. (実測図 No.25)

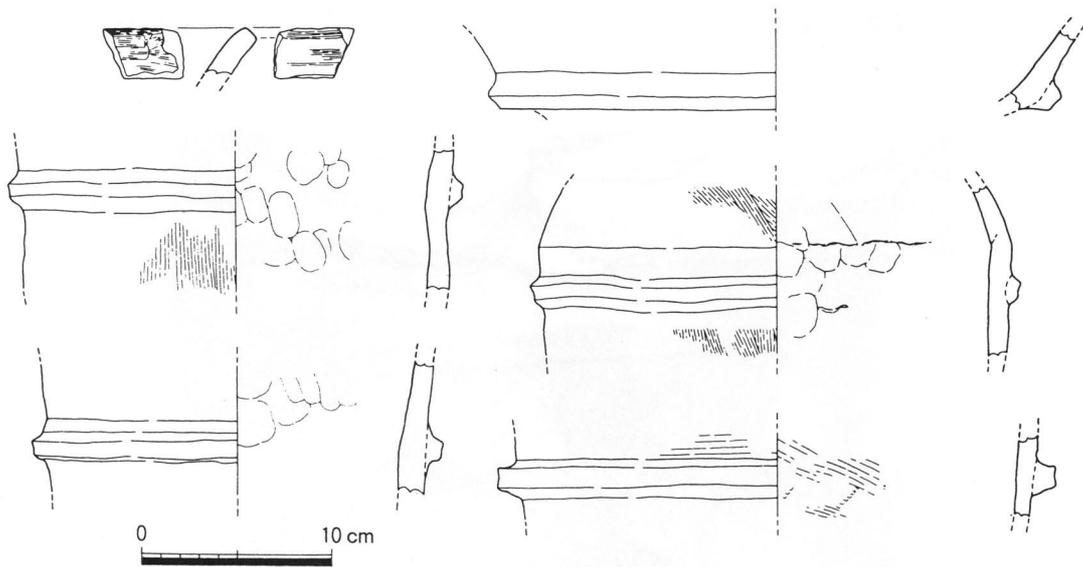


35. (実測図 No.33)



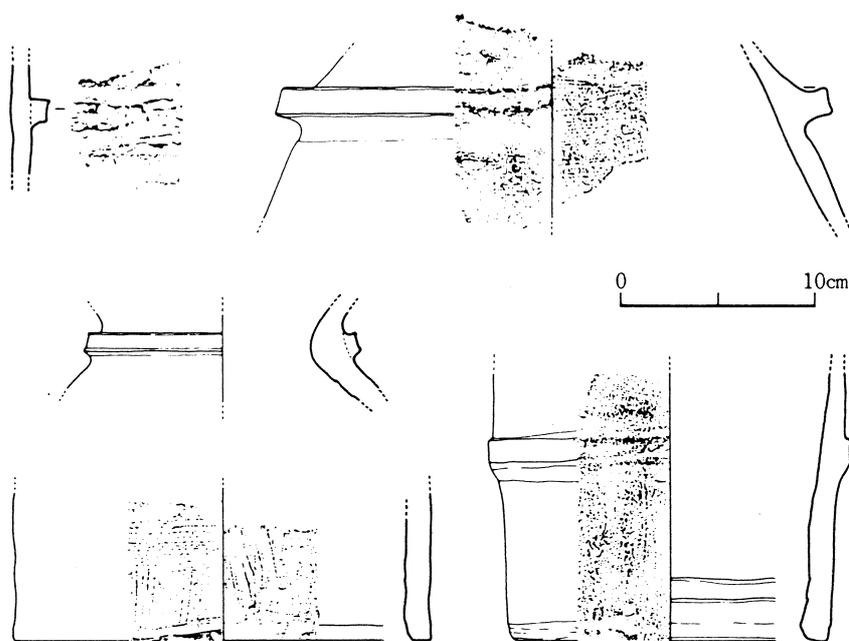
36. 鉄器の出土状況

参考資料①

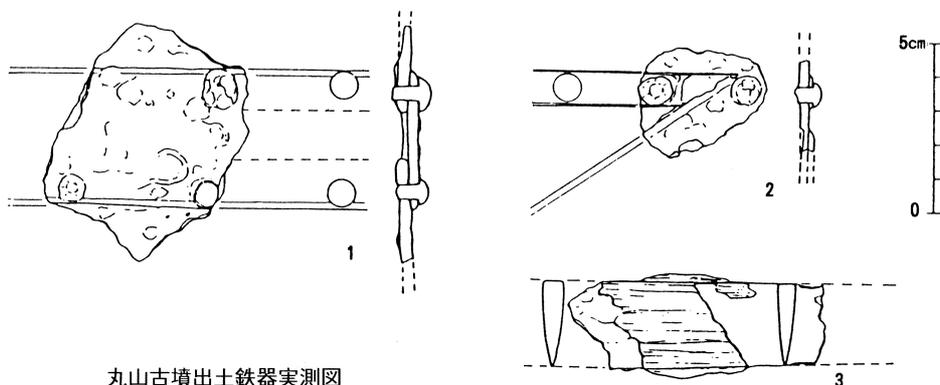


丸山古墳出土埴輪実測図

参考資料 ②



丸山古墳出土埴輪実測図



丸山古墳出土鉄器実測図

参考・引用文献

- ・間壁忠彦、間壁葭子、山本雅靖、藤田憲司「石棺研究ノート（4）」
『倉敷考古館研究集報 第12号』1976. 8.31（財）倉敷考古館
- ・間壁忠彦『石棺から古墳時代を考える』1994. 1.25（株）同朋舎出版
- ・大塚初重、白石太一郎、西谷正、町田章 編
『考古学による日本歴史9 交通と交易』1997. 2.20 有山閣出版（株）
- ・大塚初重編『図説 西日本古墳総覧』1991. 5.10（株）新人物往来社
- ・森貞次郎『九州の古代文化』1983. 9.30（株）六興出版
- ・新編香川叢書刊行企画委員会『新編 香川叢書 考古編』S58. 3.31
- ・香川考古学研究会『香川考古 第3号』1994.12 香川考古刊行会
- ・廣瀬常雄『日本の古代遺跡8 香川』S58. 3. 1（株）保育社
- ・正岡陸夫、十亀幸雄『日本の古代遺跡22 愛媛』S60. 7.31（株）保育社
- ・観音寺市誌増補改訂版編集委員会『観音寺市誌 通史編』S60. 1. 1

報告書抄録

ふりがな	かんおんじないせきはつくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書							
副書名	平成10年度国庫補助事業報告書 丸山古墳							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	久保田昇三							
編集機関	観音寺市教育委員会							
所在地	〒768-0060 香川県観音寺市観音寺町甲300番地1 TEL 0875-23-3943							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まるやまこふん 丸山古墳	かがわけん 香川県 かんおんじし 観音寺市 むろもとちよう 室本町 あごにしまるやま 字西丸山 691番	37205		34度 6分 43秒	133度 39分 5秒	19981005～ 19990305	32.4	観音寺市内 遺跡発掘調 査事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
丸山古墳	古墳	古墳	古墳 1基	鉄器 (鉄刀など) 円筒埴輪 等 (S22出土) 鉄刀 鉄鏃 短甲破片? 朝顔形埴輪 キヌガサ形埴輪 家形埴輪	<ul style="list-style-type: none"> ・埋葬施設 竪穴式石室に石棺を有する ・石棺 阿蘇熔結凝灰岩製 剝拔式舟形石棺 			

観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書
平成10年度国庫補助事業報告書

丸山古墳

1999（平成11）年3月31日発行

編集・発行 観音寺市教育委員会
〒768-0060

香川県観音寺市観音寺町甲300番地1

電話（0875）23-3943

FAX（0875）23-3925

印刷 株式会社 三和